

# 新たな資源管理について

長崎県総合水産試験場 漁業資源部 海洋資源科

## はじめに

令和二年十二月に施行された改正漁業法では、今後、水産資源を持続的に利用していくための新たな資源管理制度が創設されました。



新たな制度では、資源管理は、最新の科学的知見を踏まえて実施された資源評価に基づき管理目標を設定し、目標の達成を目指して漁獲可能量 (TAC) 等による管理を行い、資源量を維持・回復させることが基本とされています。

**資源評価の流れについて**  
 資源管理を行うために、国の水産資源研究所が都道府県と共同で、漁獲量や操業に関する情報収集等、対象魚種の資源に関する調査を行い、その調査データに基づき、

資源の評価が行われています。資源評価では、直近の資源量や漁獲の強さ等の結果に基づき、資源管理目標とそれを達成するための漁獲シナリオ (将来どのような漁獲の強さで漁獲するかをあらかじめ定めたルール) が提案されます (図1)。

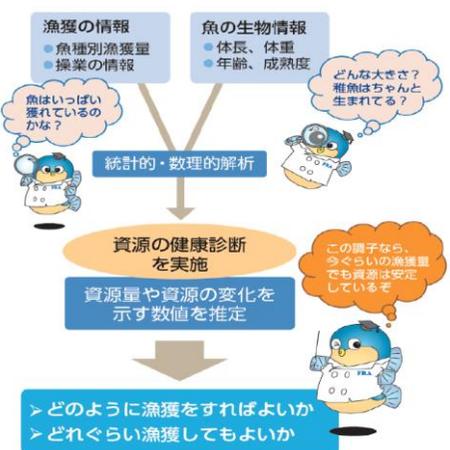


図1. 資源評価の流れ (水産研究・教育機構資料より)

## 新たな資源管理目標について

**MSYとは**

資源を保護しすぎると、魚は増えるが漁獲量は減る  
 ちょうどよい塩梅に資源保護し漁獲量を増やす  
 乱獲をすると資源が減り、漁獲量は減る

資源管理目標は、持続的に最大の漁獲量 (最大持続生産量・MSY) を得られる状態を目標として、この時の親魚の資源量を「目標管理基準値」とし、その時の漁獲の強さ (漁獲圧) を「目標となる漁獲圧」として

ます。

また、資源の状態についての新しい表示方法として、資源量と漁獲量の位置付けの推移を見ることが出来る神戸プロット(チャート)が示されます(図2)。

神戸プロットでは、右下の緑の部分に位置するときは、資源量はMSYを達成する管理目標よりも多く、漁獲の強さは適切な状態であることを示し、左上の赤の部分に位置するときは、資源量はMSYを達成する管理目標よりも少なく、漁獲の強さが過剰であることを示しています。

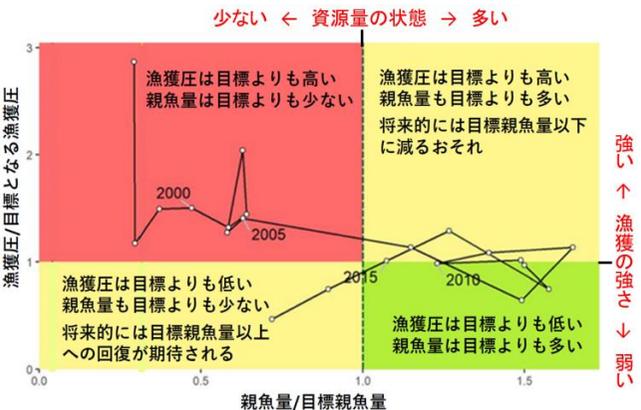


図2. 神戸プロットの例 (水産研究・教育機構資料より)

さらに、漁業者がMSYを達成するための管理方法を検討するための材料として、資源管理目標と漁獲シナリオの案が示されます(図3)。

ここで、目標管理基準値とはMSYを得るための親魚量のことであり、限界管理基準値とはMSYの六十%相当の漁獲量を、禁漁水準値とはMSYの十%相当の漁獲量が得られる親魚量のことを意味します。

図3の場合、2020年の親魚量は六・二万トンですので、MSY(五・一万トン)

を達成するためには八・四万トンまで親魚量を増やす必要があるということになります。

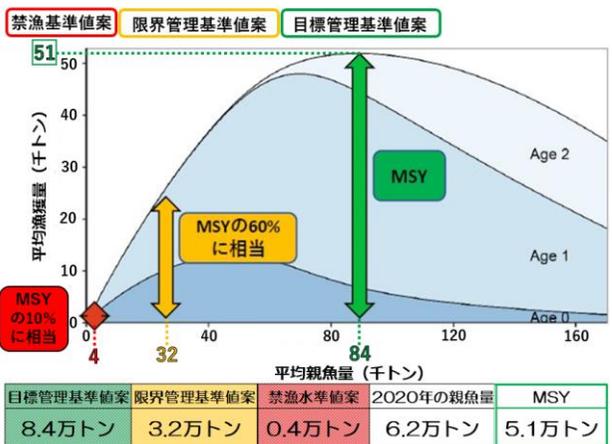


図3. 資源管理目標の例 (水産研究・教育機構資料より)

資源管理目標と漁獲シナリオは、漁業者や関係者が自由に参加出来る資源管理方針に関する検討会(ステークホルダー会議)で漁業者等の意見を十分かつ丁寧に聴き、現場の実態を十分に反映し、関係する漁業者の理解と協力を得た上で進めることとされています。

なお、資源評価結果は毎年、最新データに基づき更新されます。

### おわりに

資源管理はTACによる管理を行うことが基本と規定されており、長崎県に属するカタクチイワシ、ブリ、マダイ等で検討が進められています。TAC候補魚種を含む最新の資源評価結果は、以下の水産庁ホームページに詳しく記載されています。

※わが国周辺の水産資源の現状を知るために  
(<http://abchan.fra.go.jp/index.html>)

(担当 北原 茂)